

演題3. 歯周病唾液検査の判定とメタボリックシンドロームの関連性

○稲葉 大輔, 佐藤 保*, 箱崎 守男*, 米満 正美

岩手医科大学歯学部予防歯科学講座,
(社)岩手県歯科医師会*

目的：歯周病は有歯顎成人の85%以上に蔓延する生活習慣病で、しかも重篤な全身疾患のリスク因子である。この観点から、演者らは効率的な歯周病スクリーニングのための唾液検査システムを健診に導入してきた。この検査では歯周病の指標として唾液中の遊離ヘモグロビン(Hb)と乳酸脱水素酵素(LDH)が選択され、重度歯周疾患のスクリーニングに関する感度は、Hbが0.75(基準値4.2 μg/ml)でLDHが0.67(基準値282U/l)、同基準値での特異度はHbが0.78、LDHが0.68であることが確認されている。本研究では唾液検査値と全身状態、とくにメタボリックシンドローム(MetS)の基準項目との関連を検討した。

対象と方法：対象は歯周病唾液検査とMetS基準項目検査を受けた23~79歳の成人528名(47.5 ± 12.6歳;男性228名,女性300名)とした。唾液は、機械的刺激による歯肉出血などの影響を避けるため、食事およびブラッシングから少なくとも2時間以上経過した条件のもと、専用ガムにより咀嚼刺激唾液(全唾液)として採取した。歯周病マーカーであるHbはラテックス比濁法で、またLDHはJCCLS標準化対応法によりそれぞれ測定した。

結果：528名中のMetS該当は54名(10.2%)で、唾液検査での歯周病陽性率は64.8%であった。これは非該当群(474名)の歯周病陽性率45.6%より1.4倍高く、度数の差は有意であった($p < 0.05$, χ^2 検定)。男女別でも同じく度数の差は有意であった。また、528名全体の評価でMetS有病の歯周病陽性に対するオッズ比は2.4(95% CI: 1.33-4.31, $p = 0.003$)であった。

結論：MetS所見群は歯周病ハイリスクであることから、その予備軍も含め、歯周疾患の予防・改善を目的とした専門的な介入が必要であることが示唆された。

演題4. 腫瘍性疾患罹患児に対する口腔ケア

○角田 初恵, 松本 弘紀, 田中 光郎

岩手医科大学歯学部小児歯科学講座

目的：大学病院の小児歯科外来には、全身疾患を有する児が来院する頻度が高い。近年の外來実態調査の結果から、腫瘍性疾患の児が多いことが分かっている。そこで我々は、腫瘍性疾患を有する児の口腔内の実態を調査し、さらに、感染予防および疾患治療に伴う口腔内の不快症状を減少させることを目的に、医学部小児科と連携した口腔内管理を実施した。

対象と方法：外來調査は平成13年から17年までの4年間で、本学歯科医療センター小児歯科外來を、本学附属病院小児科からの紹介で受診した患児を対象とした。調査項目は、疾患名と口腔内所見で、診査の対象歯は乳歯である。腫瘍性疾患児の保護者に対しては口腔内症状に関する意識調査を行い、また、病棟健診が始まった平成18年2月以降の、定期的口腔ケア以外での、小児科病棟からの口腔内診査依頼件数とそのときの症状を調査した。

結果：本学附属病院小児科からの紹介で受診した患児は、4年間で100名(男児52名,女児48名,平均年齢6.5歳)であった。そのなかで腫瘍性疾患は36名で、平均年齢5.3歳だった。多い疾患は白血病だった。36名中19名に乳歯う蝕が認められ、観血的処置が必要となるC3以上のう蝕の割合が多かった。

考察：外來調査結果から、腫瘍性疾患児は健常児に比べ易感染性状態にあるが、口腔内が十分にケアされていないことが分かった。

結論：小児科病棟での定期的な口腔内検診は、齲蝕治療の必要性を早期にスクリーニングでき、非常に有効であった。